

新入生の皆さんへ

「情報発信型図書館としての本学図書館」

図書館長 上野 義和

新入生の皆さん、入学おめでとう。入学した喜び、受験の苦しみから脱出した安堵、未知の大学生活への期待と不安等々、いろいろな感情が交錯している頃だと思いますが、一日でも早く地に足が付いた目的ある大学生活を送っていただきたいという願いをこめて、そして又、その一助になればと思います、本学図書館の役割と皆さんとの関わり方について述べることにします。

(1)大学図書館と中・高校の図書室との違い

蔵書が少なく自習室的な中・高図書室と違い、本学図書館の蔵書は一般書から専門書、貴重書に至るまでの約48万冊と学術雑誌約2,540種の多きを数えます。また、現代図書館には無くてはならないコンピュータシステムが完備されています。この規模は同じ一学部から成っている他大学と比べてもひげをとりません。加えて、これまでにNHK（「その時歴史が動いた」）、民放（「知っているつもり」）などで本学図書館所蔵の貴重書が使われました。他大学に比べて、それほど貴重書が多いということです。皆さんが中学・高校の教科書を通してでしか知らないような珍しい本の原著もあります。さらに、図書の専門的知識を備えた司書による丁寧な援助体制も確立しています。気軽に足を運んでみて下さい。

(2)本学図書館の構成

本館図書館（7号館）とアジア関係図書館（9号館2F）の二つから成っています。

(3)図書館は知識の宝庫です

図書館の利用度が高い大学はそれに比例して活気づき発展する、とよく言われますが、それを実践しているのが欧米の大学です。その理由は欧米の大学生は教員による教室内の授業があくまで導入部のようなもので、それに豊かな肉付けをするのは自分自身が図書館を利用して行う勉強であると考えているからです。子供連れの主婦や老後の年金生活を享受している様子の人たちも多くいます。このことは、欧米の大学図書館は単にその構成員のものだけではなく、地域住民のための施

設でもあるという公共性を表すものです。生涯学習が当然と考えられている欧米ならではの現象ですが、本学図書館も地域住民の皆さんへの市民利用制度を行っ



ており、開かれた図書館への道を着実に歩んでいます。

(4)コンピュータと図書館

本学図書館のコンピュータシステムは文部科学省の大学共同利用機関である国立情報学研究所と接続しています。これによって、本学に無い図書文献について国内・外の図書の情報をもらうことができます。また、図書館内にある端末検索機（OPAC：オーパック）を活用すれば書誌データであるタイトル、著者名、出版社等を知ることができます。これはコンピュータに関してまず知っておくべき基礎的な事柄です。

(5)図書館のHP（ホームページ）

ここ数年HPの充実に力を注いできました結果、その成果はデータベースの形で「世界の言語と国際地域研究」、「世界を感動させた作家たち」、「ノーベル平和賞」等として実現しています。3,000冊にも及ぶオーストラリア文学書のデータベース化に対し、当時のオーストラリア大使のグレイ氏から感謝状を頂き（2001年5月25日）、それを契機に大使館及びオーストラリア図書館とコンピュータによる相互協力の実現したこと、ベーカー前駐日米国大使から感謝状を頂いた「ペリー提督来航150周年記念稀覯書展示会」（2003年、NHKTV放映）、また学生との共同製作「あの映画・あの言葉」等のデータベース化は新聞でも大きくとりあげられています。

(6)開館日数

現在年間285日ですが、300日を達成目標にしています。

(7)お願い

日本は安全な国であるという神話は近年ますます崩れてきています。貴重品は常時肌身離さず所持する習慣をつけて下さい。この習慣は、将来皆さんが外国に行った時にも必ず役に立つものですから。

最後に、本学図書館が皆さんの学習・教養向上に最大限に役立つことを願ってやみません。

うえの よしかず（教授・英語学）